

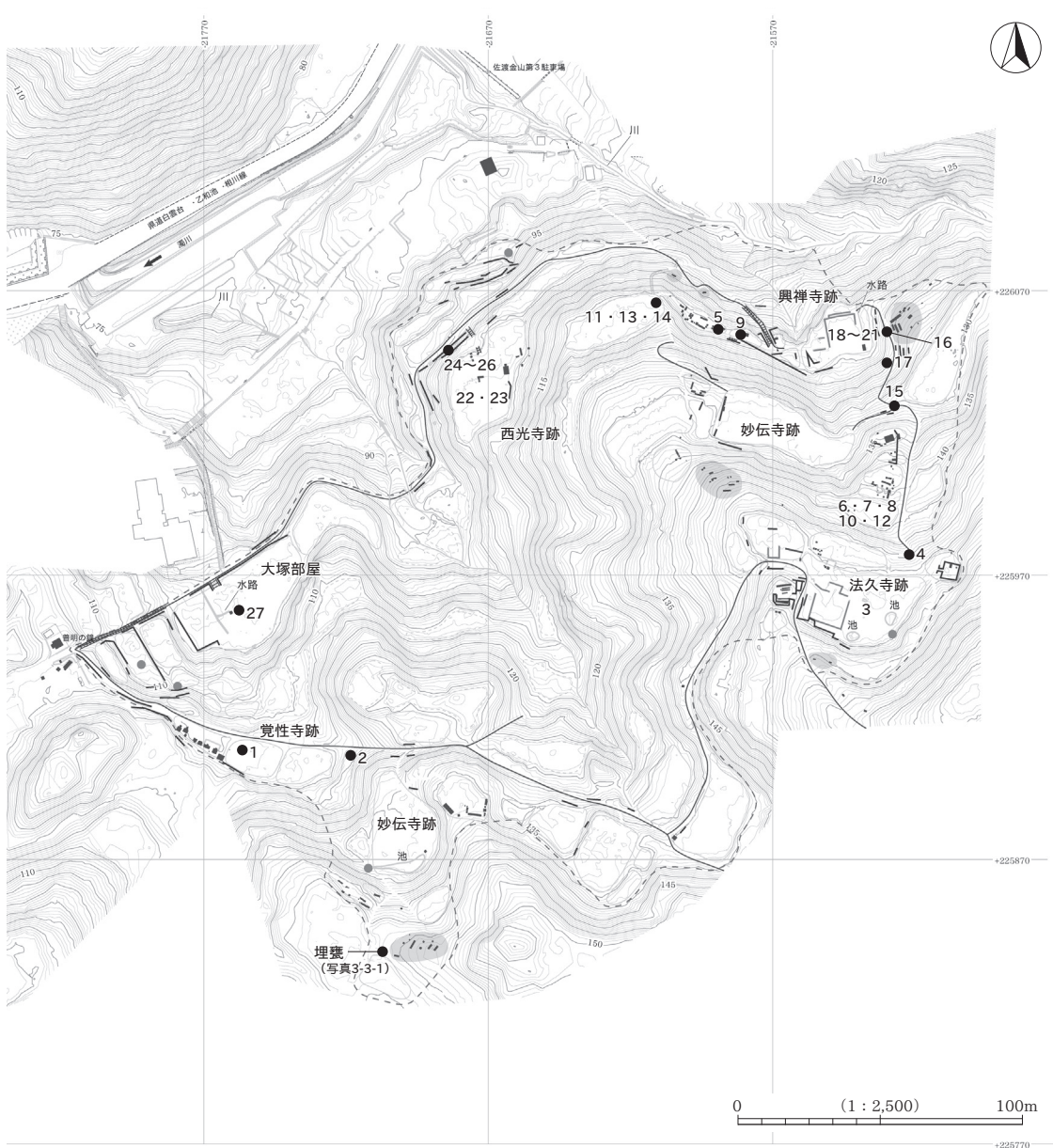
3 表採遺物

平成 25 年 5 月 14 日に上寺町地区を踏査し、56 点の土器・陶磁器類を表採した。そのうち、小片や近現代に属する遺物を除く 27 点について図化し、図版●に示した。

表採地点は、第●図に示した。遺物の産地及び年代観については大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問）からご教授賜ったが、文責は筆者にある。

1 は覚性寺跡で採取した。在地（金太郎窯系）産陶器の鉢胴部片である。内外面に灰釉を流し掛けし、オリープ褐色を呈する。19 世紀の所産である。

2 は妙伝寺跡で採取した。肥前系磁器の染付小坏である。内外面に圈線が配されるのみの簡易な施文で、高台内には「清玩」銘が入られている。19 世紀後半の所産で、近代に下る可能性もある。



第 3-3-1 図 遺物表採地点

3 表 採 遺 物

3・4 は法久寺跡で採取したもので、そのうち 4 は法久寺跡と妙法寺跡を繋ぐ古道付近で採取した。3 は肥前系磁器の色絵（青絵）盃である。櫛歯文と銘が染付された器に「塚原」と絵付けされている。器壁は極めて薄く、19 世紀中葉の所産である。4 は肥前系磁器の色絵小段重で、18 世紀末～19 世紀中葉の所産である。

5～15 は妙法寺跡で採取したもので、そのうち 15 は妙法寺跡から興禅寺跡に至る古道の分岐点付近で採取した。5 は景德鎮窯産磁器の青花碗で、17 世紀前半の所産である。6 は肥前系磁器の色絵（青絵）盃である。白磁素地に鯉絵を絵付けしたものである。3 と同様に器壁は極めて薄く、19 世紀中葉の所産である。7 は肥前系磁器の染付丸碗で、18 世紀前半の所産である。8 は肥前系磁器の染付段重で、18 世紀末～19 世紀前半の所産である。9 は肥前系磁器の染付仏花瓶で、18 世紀末～19 世紀中葉の所産である。10 は在地（金太郎窯系）産陶器の鉢である。口縁部の遺存率は低く、全容は不詳であるが輪花になるものと想定される。高台付近を除く内外面には明青灰色を呈するカラミ（鉋滓）由来の海鼠釉を施す。内面には刻花が施され、暗文もしくは象嵌に似た視覚効果を呈している。凹型高台で、内面に楕円形の窯着痕が認められることから、多脚チンガラによる重ね焼きが行われたものと考えられる。19 世紀の所産である。11 は肥前系陶器の播鉢である。遺存部は無釉で、碁笥底である。高台の畳付には糸切痕が確認できるので、底部糸切の後、高台を削り出したものと考えられる。卸目は、6 条一単位で単位間に隔たりがある。

上寺町地区表採 陶磁器・土器・瓦観察表

[混入物] 石：石英、長：長石、白：白色微粒、礫：砂礫

No.	表採地点	種別	器種	法量 (cm)			胎土 (上段：色調 下段：混入物)	成 形	調整・文様	生産地	生産年代	備 考
				口径	器高	底径						
1	覚性寺跡	陶器	鉢	—	—	—	灰 石・長・礫	ロクロ	内外：灰釉 外下半：ケズリ	金太郎窯系	19 世紀	釉調：オリブ褐色
2	妙伝寺跡	磁器 (染付)	小坏	7.6	4.8	3.2	白	ロクロ	内外：染付多重圈線 口：口銘	肥前系	19 世紀後半	底：染付銘「清玩」
3	法久寺跡	磁器 (青絵)	盃	6.4	2.6	2.2	白	ロクロ	内：青絵「塚原」 外：染付櫛歯文	肥前系	19 世紀中葉	外底：染付銘角「福力」
4	法久寺跡 (古道)	磁器 (色絵)	小段重	6.8	2.9	4.0	灰白 白	ロクロ 腰部・口：無釉	外：色絵窓絵文	肥前系	18 世紀末～ 19 世紀中葉	
5	妙法寺跡	磁器 (青花)	碗	—	—	—	灰白	ロクロ	外：染付文・二重圈線 内底：染付団花文	中国 (景德鎮)	17 世紀前半	
6	妙法寺跡	磁器 (青絵)	盃	—	—	2.8	白	ロクロ	内：青絵鯉文	肥前系	19 世紀中葉	
7	妙法寺跡	磁器 (染付)	丸碗	9.8	—	—	白 白	ロクロ	内外：染付菊花文	肥前系	18 世紀前半	
8	妙法寺跡	磁器 (染付)	段重	12.4	5.0	7.8	白 白	ロクロ 腰部・口：無釉	外：染付草花文	肥前系	18 世紀末～ 19 世紀前半	
9	妙法寺跡	磁器 (染付)	仏花瓶	5.8	—	—	灰白 白	ロクロ	外：染付草竹文	肥前系	18 世紀末～ 19 世紀中葉	内面：無釉
10	妙法寺跡	陶器	鉢	—	—	7.0	紫灰 石・長・礫	ロクロ、輪花 凹型高台	内：刻花文 内外：海鼠釉	金太郎窯系	19 世紀	多脚チンガラ痕 1 ケ 釉調：明青灰色
11	妙法寺跡	陶器	播鉢	—	—	11.2	にぶい褐 石・礫	ロクロ 碁笥底	卸目：6 条一単位 外下半：ケズリ	肥前系	1590 ～ 1630 年代	高台畳付に糸切痕 遺存部無釉
12	妙法寺跡	陶器	碗	—	—	4.0	灰白 白	ロクロ	内外：灰釉 + 長石釉	肥前系	1610 ～ 1630 年代	畳付：砂目 2 ケ
13	妙法寺跡	陶器	中皿	19.4	—	—	灰白 石・礫	ロクロ	内外：灰釉	肥前系	1610 ～ 1640 年代	
14	妙法寺跡	陶器	大皿	—	—	8.0	灰 石・礫	ロクロ	内：灰釉	肥前系	1590 ～ 1610 年代	内：胎土目 1 ケ
15	妙法寺跡 (古道)	陶器	播鉢	—	—	—	黄灰 石・長・礫	ロクロ	卸目：5 条一単位 以上	備前	16 世紀末～ 17 世紀初頭	焼き締め
16	興禅寺跡	磁器 (染付)	筒丸碗	6.4	5.8	3.4	灰白	ロクロ	外：染付草花文	肥前系	1820 ～ 1860 年代	
17	興禅寺跡	磁器 (染付)	丸碗	8.2	—	—	白	ロクロ	外：染付文	肥前系	17 世紀後半	内：窯着物あり
18	興禅寺跡	磁器 (染付)	丸碗	8.0	—	—	灰白 白	ロクロ	外：染付線描菊花文 内：染付二重圈線	肥前系	1780 ～ 1810 年代	被熱
19	興禅寺跡	陶器 (灰釉鉄絵)	端反碗	7.6	—	—	灰	ロクロ	外：白釉 + 鉄絵 内：白釉 (貫入多)	関西系	19 世紀	
20	興禅寺跡	瓦	軒平瓦	—	—	—	明褐 石・長・礫		施釉 (鉄泥)		18 世紀後半～ 19 世紀	
21	興禅寺跡	陶器	鍋	—	—	8.4	にぶい黄褐 石・長・礫	ロクロ	外上半：ケズリ 外下半・底：ナデ	金太郎窯系	19 世紀	外：スス 内：鉄釉 多脚チンガラ痕 1 ケ
22	西光寺跡	土師質土器	灯明 受皿	3.8	2.6	4.0	にぶい褐 石・長・礫	ロクロ 底：回転系切り	—	在地		内外：スス
23	西光寺跡	土師質土器	灯明 受皿	3.8	2.6	3.2	にぶい黄 石・長・礫	ロクロ 底：回転系切り	—	在地		内外：スス
24	西光寺跡 (石垣付近)	磁器 (染付)	端反碗	8.9	—	—	灰白	ロクロ	外：染付斜行矢羽文 内：染付圈線	瀬戸美濃	19 世紀	
25	西光寺跡 (石垣付近)	磁器 (染付)	丸碗	—	—	—	灰白 白	ロクロ	外：染付草花文	肥前系	18 世紀前葉～ 中葉	
26	西光寺跡 (石垣付近)	土師質土器	灯明 受皿	—	—	5.1	にぶい黄 礫	ロクロ 底：回転系切り	—	在地		内外：スス
27	大塚部屋跡	磁器 (青磁染付)	碗	—	—	3.7	灰白 白	ロクロ 畳付：軸刺ぎ	外：青磁 内：染付二重圈線	肥前系	18 世紀中葉	

1590～1630年代頃の所産である。12は肥前系陶器の灰釉碗である。畳目に砂目が2箇所認められることから、1610～30年代頃の所産である。13は肥前系陶器の灰釉折縁中皿で、1610～40年代の所産である。14は肥前系陶器の大皿底部である。削り出し高台で、内面には灰釉が施される。内面には胎土目の痕跡と思われる釉の剥落が認められることから、1590～1610年代の所産と考えられる。15は備前産陶器の播鉢胴部片である。内外面は無



写真 3-3-1 妙伝寺跡の埋設甕

釉。卸目は5条一単位以上で、口縁に対し斜位に施されている。16世紀末～17世紀初頭の所産である。

16～21は興禅寺跡で採取した。16は肥前系磁器の染付筒丸碗で、1820～60年代の所産である。17は肥前系磁器の染付丸碗で、17世紀後半の所産である。内面には窯着物が認められる。18は肥前系磁器の染付丸碗で、1780～1810年代の所産である。被熱している。19は関西系陶器の灰釉鉄絵端反碗で、19世紀の所産である。灰色の胎土に、灰オリーブ色を呈する灰釉を内外面に施し、その上から白釉を流し掛けする。白釉は貫入が多く見られる。さらに白釉の上には、部分的に鉄絵が施される。20は軒平瓦である。全面に赤味を帯びた鉄釉(泥)が施されている。18世紀後半から19世紀代の所産と考えられる。21は在地(金太郎窯系)産陶器の鍋底部である。外底面付近には、円錐形に近い形状を呈する団子状の脚が1箇所に認められる。内面には鉄釉を施すが、外面遺存部は無釉である。外面の胴部上半には横位のケズリ調整がなされ、下位はナデである。外面にはススが付着する。外底面はナデ調整される。内底面には長方形基調の多脚チンガラ窯着痕が1箇所に見られる。

22～26は西光寺跡で採取した。そのうち、24～26はテラス下に位置する石垣付近での採取である。22・23・26は在地産と考えられる土師質土器で、灯明受皿である。いずれもロクロ成形で、底部に糸切痕が認められる。内外面にスス及びタールが厚く付着しており、本品に直に油を注いで灯明具として使用していた可能性もある。24は瀬戸美濃産磁器の染付端反碗で、19世紀代の所産である。25は肥前系磁器の染付丸碗で、18世紀前葉～中葉の所産である。

27は大塚部屋跡で採取した。肥前系磁器の青磁染付碗である。腰の張る器形で、内底面には二重圏線の染付が施されている。18世紀中葉頃の所産である。

写真 3-3-1 は妙伝寺跡内に現在でも埋設されている越前産陶器の大甕である。周囲には現在でも水を湛えている井戸が点在する。甕は、埋設されているので全容は不明であるが、露出している口縁部形状及び鉄泥が施されていることから17世紀代の所産である可能性が極めて高い。口径は56cmを測る。